

～ “あのころ” の会報編集委員長からのお便り～

# 思い出すままに — 会報60周年を祝って —

東北大学名誉教授  
会報30巻(1991年)編集委員長；及 川 洪

日本金属学会の会報は第1巻が1961年発行で、今年60周年を迎えるとのこと。私は1955年(学部3年生)に金属学会に入会したので、私の方がちょっと先輩というところですね。

それまで日本金属学会誌1本であったものを、1961年から「研究論文」と「その他」に分けたのです。2誌に分けることには色々と議論(主として経済的な心配?)があったようです。また1960年には欧文誌の刊行開始(当初は季刊)もあり、この時期、金属学会内部では色々な検討があったようです。しかし、大学院の学生であった私には、全くの他人事でした。ただ「日本金属学会会報」というのは“随分長い名前だなあ”とは思っていたような記憶があります。

ところが、2年間の米国出張から帰国する(1968年3月)と、次の年から会報編集委員会に引っ張り出され、何と1984年までその任にあったらしい(本人にはあまり明瞭な記憶がない)。学会本部のある地元の東北大学に勤めていたこともあり、2年間遊んできたのだから使ってやれ、とばかりに引っ張り出されたようです。

金属学会では各種委員は2年あるいは4年で交代するのが普通でしたが、比較的長期にわたって委員を続ける人も少しはいる方が良いという考えがあったようで、私は分科会委員(今の講演大会+シンポジウムなど担当)、国際交流委員などもかなりの期間務め(させられました)。東北大学を定年退職(1997年3月)するまでの間、評議員や理事と、それに伴う各種委員など(定款に従って途切れ途切れに)何回か務め、それなりに働いた(働かされた?)と思っています。大学勤務最後の年(1997年)には会長を務めさせていただいたのですが、これはほとんど名だけの1年で、特色ある仕事はできませんでした。言い訳をすれば、工学部長との二股は、私には荷が重過ぎたということです。

会報関連で思い出すのは、SI単位使用について早い時期から旗を振ったことです。金属学会こそ「全学問分野で統一的に利用できる単位を使用する」ことに最もメリットがある分野だとの思いから、かなり強力にSI単位の使用を推し進めました。SI単位などに関する23ページの冊子やSI単位一覧表の下敷きが作られ、配布されました。赤い表紙の別冊子(23ページ)は会報30巻(1991年)の、また青色の下敷きは32巻(1993年)の付録でした(図1)。SI単位は今ではごく普通

に用いられていますが、JISがSI単位表記に切り替わるまでは、その利用にはかなりの抵抗がありました。

1980年代後半に、会報の名を「日本金属学会会報」からもう少し軟らかい感じのものに変えてはどうかという話が出されるようになり、いっそ「ひらがな」ということになって、1994年からラテン語風の「まてりあ materia」にすることになりました。私も原案提案者の一人であったのですが、実は materia は英語で言えば matter に相当する言葉です。matter(物質 materia)と materials(材料 materialia)とは“物”に対する見方が違うと授業では言うておきながら、会報の名称には matter に対応する名称を付けてしまったことは、いまだに気になっています。もっとも、日本語的にはマテリアーリアよりもマテリアの方が言い易いことは救いかも知れませんね。

欧文誌 Transactions of J.I.M.(1960年刊行開始)の名称変更にも少し関わりました。Materials Transactions は s で終わる単語が続くので、日本人的にはゴロがあまり良くないという声もあったのですが、この様な(単純な)誌名は当時他になかったので、これにしようということになりました。(注:昔、イギリスの金属学会だけ国名の付かない The Institute of Metals だったのですが、これは世界で初めて金属学会を創立したので、他と区別する必要がなかったため、と理解される。)誌名の後に当初は“JIM”が付いていたのです

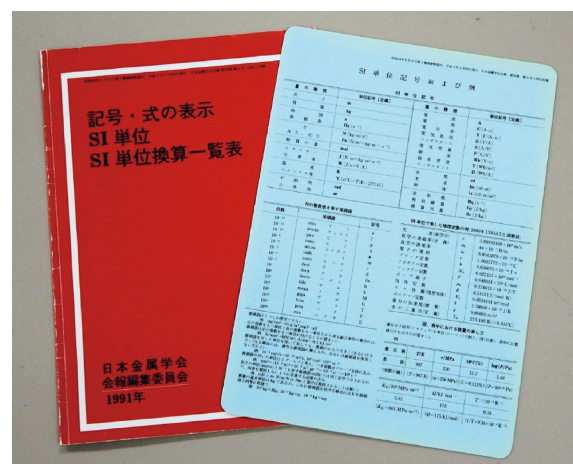


図1 SI単位をまとめた会報30巻と32巻の付録.

が、これは“Trans. J.I.M.の続きであることが分かるようにしておこう”とあえて付けたものでした。したがって、共同刊行となった時(2001年)に、JIMのないスマートな形になって良かったと思っています。

編集とは関係ない話ですが、「金属および合金の強度」国際会議が、金属学会創立30周年記念事業として1967年に東京で開催されました(私は米国出張中で不参加!)。これが契機となって、強度関連の国際会議 ICSMA が各国廻り持ちで開催されることになり、以後3年ごとに開催されています。私はこの国際会議が日本で始められたことを世界的に再認識してもらいたい機会だと思い、第10回(1994年)を記念して、日本金属学会主催で再び日本で開催したいという提案をしました。金属学会内では、ぜひ開催しようということになり、第8回(1986年)の時に ICSMA 委員会に申し出ました。ICSMA 委員会では、実は適当な次候補団体が見当たらず、

第8回で打ち切るかという話も内々には出ていたらしく、「第10回を再び日本で」という申し出は極めて好意的に受け止められたようです。このような訳で、第10回はめでたく1994年に、学会事務局のある仙台で開催されました。

実は次の節目である第20回も日本で開催できたらと思います。現役の方々に声をかけていたら、第20回(2024年)をまた日本で開催するということが決まったとのこと。第10回を実行した者としては大変喜ばしく思います。

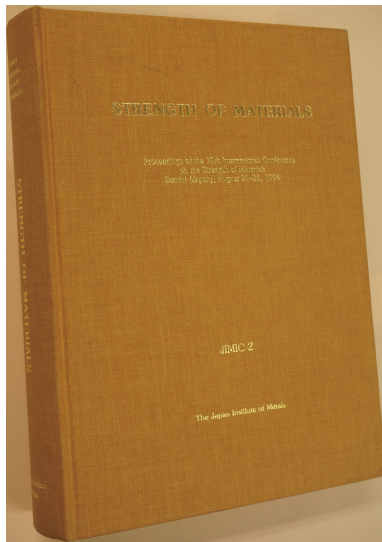
私自身はもう歳ですから、第20回の集会には出席できないかも知れないのですが、金属学の先輩達の色々な努力が報われ、活動が続けられることは、誠に喜ばしい限りです。

これからも、若手の皆さんが日本金属学会の旗の下で活発な活動を続けることが可能であるよう願っています。

(2021年3月4日受理)[doi:10.2320/materia.60.359]



会報30巻(1991)の表紙.



Proceedings of the 10th International Conference on the Strength of Materials ; ICSMA 10(1994).

